PROCEEDINGS 16 33-42
July 2011

現代中国における父親の養育行動と高校生の自尊感情
―山西省の農村部と都市部の比較―

劉　　楠
（ジェンダー学際研究専攻）

Ⅰ．研究背景と目的

1949年、中華人民共和国の成立により、男女平等の社会主義理念に基づき、「男も女も仕事も家事・育児も」（宮坂 2007）といった家庭内の規範が出来上がった。伝統的な「男は仕事、女は家庭」という家庭内役割分業の様式が儒教主義の家父長制から根本的に変わってしまった。現代の中国では共働き家庭が多く、都市部では妻の収入は夫の収入とほとんど変わらず、妻・夫間の家計責任の共同分担はきわめて高いとされている（中国社会科学院社会学研究所婚姻家庭研究室 1994）。農村部においても、男女平等の社会主義理念の影響で、農村の女性たちが社会へ進出し、家庭内において男性の「唯一の稼ぎ手」としての立場はなくなってきている。しかし、特に北方地域では、依然として「男は仕事、女は家庭」の性別役割規範の観念が強く、夫が稼ぎ役を担い、妻は家事・子育てを主に担っている家族が少なくない（費 1993）。このように、現代の中国においては家庭内での男女別の役割が大きく変化してきているが、現代と伝統的な役割観念や様式が混合し、多様になってきている。

家族を重要視する中国の伝統的な文化においては、家族の名誉などを維持することが重んじられており、親の役割として「教子成材、光宗耀祖」（祖先の名を上げるために子どもを良く躾ける）ということが最も重要であるとされている。家庭内の役割について父親と母親の役割が明確に分けられ、父親が主に社会規範などを子どもに教え、知的な教育を担っている。一方、母親は子どもの日常生活の世話を担当し、父親の家庭教育を手伝う役目を持っている。このような父親の教育役割により、子どもの社会化には父親の影響が大きいと指摘されている（Lynn 1978 = 1981）。

また、日米の研究によると、父親は子どもの発達に大きく影響しており、父親の子育て参加は子どもの自尊心や社会化の向上に寄与している（Lamb 1953=1981; 石井クンツ 1998）。しかし現代社会では、長時間労働で忙しい父親は家庭をかえりみる時間がなく、そして「母子密着」と「父親不在」の育児状況のなかで、母親の閉塞感がストレスになり、子どもへの感情的支配をもたらすことなど、また子どもの非行の増加に関係するとされている（矢澤 2003）が、中国においても同じ傾向にあると思われる。孫（2009）は、現代中国において思春期の子どもにおける父親不在の家庭の割合が増加しており、父親の不在が社会の隠れた問題であると指摘している。

子どもの発達においては、小・中学校まで母親の子どもへの影響力が高いが、一方、反抗期と思われる高校生では、母親よりも父親の威厳が認知されており、父親の子どもへの影響力が上昇している（孫 2009）。しかしこれまで、親子関係の研究は、母子を対象とする研究が中心になされてきた。父親の子育てを対象とした研究はまだ少ないのが現状であり（石井クンツ 2009）、中国においても同様で（孫 2009）、父親を対象とする研究が必要に思われる。

1978年、一人っ子政策が実施された。都市部においてはこの政策が徹底され一人っ子家族が多いが、農村部では二人以上の子どもを持つ家族が少なくない。都市部の親にとって、二人目の子どもを出産すると職場から解雇されるといった賞罰制度があるため、二人目を出産することは事実上禁じられている。一方で、農村部ではそのような制度はなく、親は自主的に選択して一人っ子を持つ場合が多いと指摘されている（肖・風 2010）。このように、都市部と農村部における一人っ子家族の形成要因は異なるとされている（肖・風 2010）。

本論文では、農村部と都市部の違いに焦点を当て、父親の養育行動が子どもの自尊感情へどのような影響を与えているか、また、父親の養育行動を規定する要因について検討し、農村部と都市部の父親の比較をすることを目的とする。農村部と都市部における父親の養育行動を比較する理由は2つある。第1に、高度経済成長期の中国では農村部と都市部による父親の所得格差が目立ち、またこの格差が拡大する傾向にある（谷口ら 2009）。第2に、父親を対象とする研究では、父親の社会階層や人種などの多様性が重要であるにも関わらず、日本における父親研究は中流階級

のサラリーマン家庭に限られていることが多く、多様な父親に関する研究はまだ少ない（石井クンツ 2009）。これは中国においても言えることであり、父親の階層差や地域差に焦点をあてた研究の展開が必要であると考える。子どもの自尊感情に焦点をあてる理由としては、子どもの自尊感情は子どもの発達を測定する際に用いられている重要な変数であるからである。

Ⅱ．先行研究と本研究の研究概念図

1. 親の養育行動と子どもの自尊感情

自尊感情は、自分自身の能力や特性に対する肯定的あるいは否定的な感情であると定義されており（Rosenberg 1965）、自尊感情が高い場合には、精神的に健康とすることが多く、ストレスも低いとされている（内田 2007）。また、自尊感情は比較的安定した個人的評価であるという側面と、日々の出来事によって変動するという側面もある。本論文の研究対象は思春期の子どもであり、自尊感情の測定の項目には学校生活・友人関係に対する自信と家庭での受容感などを中心に取り上げる。

子どもの自尊感情は親の養育行動に影響されやすい（Holmbeck et al 1995；末盛 2000）。先行研究を概観すると、親の養育行動を検討する際に、親の統制行動と支援行動が頻繁に検討されてきた。親の統制行動は厳格的統制、説得的統制、モニタリングから成り、親の支援行動は情緒的サポート、民主的育成、勉学への関与、生活への関与から構成されている。

まず、親の統制行動のうち、説得的統制と厳格的統制の類似点を見ると、子どもを躾ける際の厳しさと、子どもに対する統制的な行為がある。一方、権力的な威圧においては、厳格的統制が説得的統制より一層目立つといわれている（Holmbeck et al 1995）。子どもへの統制行動に関しては、親の妥当な統制行動によって、子どもが親の定めた規則を認識し、親に従う行動を取るという傾向にある（Maccoby & Martin 1983）。しかし親が子どもに対し極端に厳格的な態度を見せると、子どもが非行に走りやすいという報告もある（Patterson 1986）。また、親の子どもに対するモニタリングが低ければ、子どもの問題行動が増加するとも指摘されている（Holmbeck et al 1995）。父親の子どもへの統制行動の研究によると、父親の統制が中学生の心理的ディストレスを上昇させるという報告がある一方（石川 2004）、直接かつ明瞭な父親の統制行動が思春期の子どもの自尊感情を向上させるという結果も得られている（劉 2010）。

次に、親の支援行動において、親の民主的育成と情緒的サポートの頻度が高ければ、子どもの自尊感情が高くなる（Holmbeck et al 1995）。母親の情緒的サポートが思春期の子どもの自尊感情を向上させている。親の勉学への関与と自尊感情の関係については、勉学への関与がより多くなされた場合、親の情緒的サポートが子どもの自尊感情に与える影響は減少すると報告されている（末盛 2000）。

2. 親の養育行動の規定要因

父親の家事参加と育児参加の関連については正の相関関係があり、家事参加の高い場合、育児参加も高くなる（Ishii-Kuntz & Coltrane 1992）。しかし、家事参加が父親の養育行動へどのように影響しているかについての研究はまだ数少ない。中国の農村部の父親において家事参加が高ければ、父親の統制行動が多くなるという報告がある（劉 2010）。米国の階層研究によると、収入や学歴の高い家庭では、親の厳格的統制が低まり、民主的育成が高まるとされている（Gecas 1979）。

夫婦間の葛藤が親の養育行動に与える影響について、米国の研究では、夫婦間の葛藤があると養育行動にゆがみが生じるという「流出仮説」がある。夫婦間の喧嘩が頻繁にあると、親は子どもに対して冷淡、拒否的な養育行動を取るとされている（Krishnakumar & Buehler 2000）。日本の先行研究においては、夫婦関係が不和である場合には、子どもに対する暖かい養育行動が減少するという報告がある一方、厳しい非受容的な養育行動が増加するとされている（堀口 2006）。

子ども数と親の養育行動の関係について、馬・平山（1989）は日中の比較を通して、両国ともきょうだいのいる家族よりも一人っ子家族の母親のほうに過保護傾向がみられたが、中国の場合は日本より一層顕著であることを指摘している。また、一人っ子ときょうだいのいる子どもの性格の特徴と社会適応の相違については、子どもの発達段階により異なると報告されている（肖・風 2010）。つまり、小学校の段階においては社会適応の差がやや大きく、きょうだいのいる子どものほうが一人っ子よりも社会適応力が高いが、思春期の段階ではほとんど差がみられないという。

図１に本論文の研究概念図を示した。上述した先行研究を基に、父親の養育行動が子どもの自尊感情へ及ぼす影響および父親の養育行動の規定要因を検討する。農村部と都市部それぞれの地域において類似点と相違点を明らかにしたいため、農村部と都市部に分けて分析を行う。本研究で検証する仮説は以下である。

仮説 1. 父親の厳格的統制、説得的統制、モニタリングが高いほど、子どもの自尊感情が高くなる。

仮説 2. 情緒的サポート、民主的育成が高ければ、子どもの自尊感情が高くなる。

仮説 3. 父親の子どもの勉強への関与、子どもの生活への

関与が高ければ、子どもの自尊感情が低くなる。

仮説 4. 父親の家事参加が高ければ、父親の養育行動が高まる。

仮説 5. 父親の年収が高ければ厳格的統制が低くなり、民主的育成が高まる。

仮説 6. 夫婦間の葛藤が多ければ統制行動が高まるが、支援行動が低くなる。

仮説 7. 子どもの数が少なければ、父親の養育行動が高くなる。

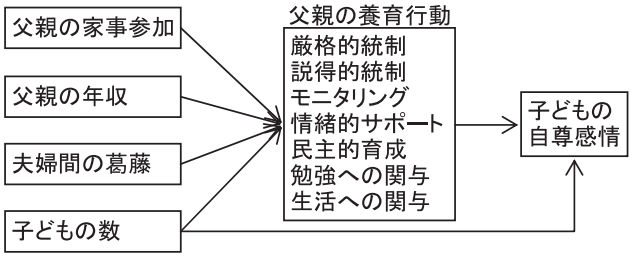

図 1　研究概念図

Ⅲ. 方法

1. 調査時期・方法

農村部においては、2009 年 9 月～ 10 月に中国山西省[1]の小都市 A 市の郊外の高校でデータを収集したが、都市部のデータ収集については、2010 年 9 月～ 10 月に山西省省庁所在地 B 市内にある二つの公立高校に依頼しアンケート調査を行った。調査対象者は、当時在学していた高校 2 年生とその父親である。高校生に対しては学校での集合調査を行ったが、親への質問紙は高校生が読めないように専用の封筒に入れて、高校生を介して配布し、回収した。2009 年度の農村部において 400 組を配布し、372 組を回収した（回収率 93%）。2010 年度の都市部においての配布数は 500 組で、回収数は 374 組（回収率 74.8%）であった。

2. 対象者の属性

父親の平均年齢は、農村部 42.01 歳（33 歳～ 54 歳）、都市部 44.67 歳（37 歳～ 56 歳）であった。就業形態について、農村部では農民が 4 割強、自営業者と政府機関の職員が 1 割強、企業・団体の正社員と臨時雇いが 1 割弱を占めているに対し、都市部では企業・団体の正社員が 4 割弱、自営業者が 2 割、政府機関の職員と臨時雇いが 1 割強、農民が 1 割未満という割合であった。

父親の年収について、農村部では 5 千元（約 7.6 万円）～ 1 万元未満（約 15.2 万円）が 3 割強、1 万（約 15.2 万円）～ 5 万元未満（約 76 万円）が 4 割強を占めており、5 万元以上（約 76 万円）は僅か（5%）であった。一方都市部では、5 千元（約 7.6 万円）～ 1 万元未満（約 15.2 万円）が 1 割強の割合で、1 万（約 15.2 万円）～ 5 万元未満（約 76 万円）が 4 割強、5 万元（約 76 万円）～ 30 万元未満（約 456 万円）が 2 割強を占めており、30 万元以上（約 456 万円）は僅か（2%）であった。子どもの数について、都市部では一人っ子家庭が 6 割弱で、二人っ子家庭が 3 割強を占めている一方で、農村部では一人っ子家庭が 3 割強で、二人っ子家庭が 5 割強となっている。

3. 分析に用いた変数

（1）従属変数

自尊感情については原田ほか（1995）に基づき、勤勉性、自信感、受容感、自己表現の尺度を作成した。詳細には「わからないことがあれば分かるまで自分で調べる」、「学校の成績には自信をもっている」、「困難なことにぶつかったときは頑張るほうだ」、「家の中にいて私はとても幸せだ」、「皆の前ではっきりと自分の意見が言える」、「学校生活は楽しい」、「先生に好かれていると思う」、「友達に好かれていると思う」の 8 項目に対し、「あてはまる（4 点）」、「ややあてはまる（3 点）」、「あまりあてはまらない（2 点）」、「あてはまらない（1 点）」の 4 段階で高校生の回答を求めた（$\alpha = 0.71$）。

（2）媒介変数

父親の養育行動については、Hombeck et al（1995）と末盛（2008）の尺度に基づき、23 項目を用いて、「頻繁にある（4 点）」、「時々ある（3 点）」、「めったにない（2 点）」、「全くない（1 点）」の 4 段階で父親に尋ねた。父親の支援行動に関する項目はプロマックス回転による主因子法の分析の結果、値の低い 5 項目を除き、抽出された因子は 4 つであった。第 1 因子は「子どもの話を聞いている」、「子どもを励ましている」、「子どもと意見が食い違う時、子どもの意見に耳を傾ける」、「子どもにはいつも優しく接している」、「子どもに『何故？』と聞かれる時、きちんとその理由を説明する」、「子どもを叱る時、自分の考えを告げた上で注意をする」、「子どもの学校生活について尋ねる」、「子どもの表情や振る舞いを観察している」の 8 項目から成り、子どもへの情緒的サポートと子どもの行動を注意深く観察することを表すものであるから、「情緒的支援・モニタリング」（$\alpha = 0.80$）と命名した。第 2 因子は「子どもの物を洗濯している」、「子どもの部屋等を片付けている」、「子どもの食事を用意している」、「学校に遅刻しないように、子どもを起こしている」の 4 項目を使用し、子どもの生活行動への関与を示すものであるため、「生活への関与」（$\alpha = 0.71$）とした。第 3 因子は「子どもが自分の言うことに従うまで、同じことを言う」、「子どものすることに口出ししてしまう」、「子どものマナーを良くするために厳しく叱る」、「子どもに対しては、何かにつけて小言を言う」の 4

項目から構成され、子どもを厳格にしつけることを示すものなので、「厳格的統制」（α = 0.57）とした。クロンバック α 係数はやや低いが、本研究では重要な変数であるのでそのまま使用した。第4因子は、「『自分の部屋を片付けなさい』と言う」、「『自分の物を洗濯しなさい』と言う」からなり、2項目のため信頼性係数を得ることはできなかったが、「生活への指示」と命名した。

（3）独立変数

父親の家事参加については、「ゴミ出し」、「日常の買い物」、「部屋そうじ」、「洗濯（取入れだけでも可）」、「食事の用意」、「食事の後片付け」の6項目に関して、「頻繁にする（4点）」、「時々する（3点）」、「めったにしない（2点）」、「全くしない（1点）」の4段階で父親の回答を求めた（α = 0.83）。

夫婦間の葛藤については、「日常のささいなこと」、「子どもの躾け」、「子どもの成績」、「子どもの将来」、「子どもの生活」、「親族との関係」、「家族のお金の使い方」、「家事分担」8項目に対してどれくらいの頻度でけんかするのかを尋ねた。選択肢は「毎日（4点）」、「週1、2回（3点）」、「月1、2回（2点）」、「全くしない（1点）」の4段階法を用いた（α = 0.86）。

4. 分析手法

分析は、各変数の記述統計と、農村部、都市部それぞれにおいて相関分析を行った後にAMOSを用いて多母集団パス解析をした。AMOSで多母集団分析を用いた理由として二点挙げられる。まず、異質の二つの集団を別々に分析する場合、研究仮説の比較を両集団で同時に検討できない（豊田 2007）。また、多母集団分析を用いた場合、複数の母集団から抽出された標本を同時に分析することができ、さらにモデル全体における母集団間での差異の有無を検討することが可能である。なお、分析の際、属性変数には欠損値を除き、それ以外の変数については平均値で置き換え、最終的には父子ペア640組（農村部339組、都市部301組）を使用した。

Ⅳ. 分析結果

1. 記述統計

表1に記述統計を示す。まず、従属変数である自尊感情は、農村部の高校生のほうが都市部の高校生よりもやや高い。次に、父親の養育行動について、生活への関与、厳格的統制においては、都市部の父親のほうが農村部の父親よりもやや高い。一方、情緒的支援・モニタリング、生活への指示においては、農村部の父親のほうが都市部の父親よりやや高い。父親の家事参加については、都市部の父親における平均値のほうが農村部の父親よりわずかに高い。夫婦間の葛藤について農村部の父親の回答が都市部の父親よりやや高い傾向がみられた。都市部の父親の年収の平均値は、農村部の父親の年収よりやや高かった。子どもの数については、農村部の平均値が都市部よりもわずかに高い。

表1　記述統計

地域		平均値	標準偏差	範囲	α 係数
農村部	自尊感情	24.74	2.99	17 ～ 32	.71
（N=339）	情緒的支援モニタリング	23.91	4.14	11 ～ 32	.80
	生活への関与	8.37	2.89	4 ～ 16	.71
	厳格的統制	9.03	2.34	4 ～ 16	.57
	生活への指示	4.64	1.88	2 ～ 8	-
	父親の家事参加	14.62	3.82	6 ～ 24	.83
	夫婦間の葛藤	15.11	4.81	8 ～ 31	.86
	父親年収	3.30	.99	1 ～ 8	-
	子どもの数	1.76	.68	1 ～ 4	-
都市部	自尊感情	24.51	3.05	17 ～ 32	.71
（N=301）	情緒的支援モニタリング	23.43	4.53	8 ～ 32	.80
	生活への関与	8.41	3.01	4 ～ 16	.71
	厳格的統制	9.12	2.33	4 ～ 15	.57
	生活への指示	4.32	1.78	2 ～ 8	-
	父親の家事参加	14.73	4.55	6 ～ 24	.83
	夫婦間の葛藤	13.74	4.62	8 ～ 32	.86
	父親年収	3.97	1.44	1 ～ 8	-
	子どもの数	1.56	.69	1 ～ 4	-

2. 相関分析

相関分析の結果を表２に示した。第１に、父親の情緒的支援・モニタリングが子どもの自尊感情と正の相関関係があり（農村 r=.276, p<.001、都市 r=.270, p<.001）、この点において都市部と農村部で同様の結果が得られた。すなわち、父親の情緒的支援・モニタリングが高い場合、子どもの自尊感情が高まるという結果がみられた。また、父親の家事参加が高い場合、子どもへの情緒的支援・モニタリングが高まり、生活への関与も高くなり、さらに、生活への指示も高いということが明らかになった。夫婦間の葛藤の高い場合、厳格的統制が高まり、父親の子どもの生活への関与と指示も高いことが示された。

第２に、農村部の父親において厳格的統制が情緒的支援・モニタリングと正の相関関係があり（r=.179, p<.01）、農村部の父親は厳格的統制が高いと、子どもに対する情緒的支援・モニタリングも高い傾向が見られた。このような結果は農村部のみで見られた。また、農村部においては子ども数の少ない家族の場合、父親の家事参加が高まり、夫婦間の葛藤も高くなるということが示された。

第３に、都市部では子どもの数と自尊感情において、正の相関関係が見られた（r=.115, p<.05）。すなわち、子どもの数の多い家庭の場合、子どもの自尊感情が高いことが示された。一方、農村部ではこの点において有意な相関関係は見られなかった。また都市部の父親において年収は父親の家事参加と負の相関があり（r=-.123, p<.05）、都市部では父親の年収が低い場合、父親の家事参加が高いことが明らかになった。また、子どもの数の多い家庭では、父親の厳格的統制が多く、生活への指示も高い。さらに、子どもの数は父親の年収と負の相関がみられ（r=-.242, p<.001）、父親の年収が低い家庭ほど、子どもの数が多い傾向が示された。

3. 多母集団パス解析

農村部と都市部のモデルについては、異質性あるいは等質性を検討するために、「モデル 1. 制約なし」、「モデル 2. 構造モデルのウェイト」、「モデル 3. 構造モデルの共分散」に分けて分析した（表３参照）。その結果、「モデル 2. 構造モデルのウェイト」は、モデル１と３よりも相対的に適合度が良いという結果が得られた。構造モデルのウェイトのモデルにおいて、集団間、母集団の分散共分散行列が等しいという強い制約が仮定されるため、このモデルの適合が良好である場合には、複数の集団は、同一の分散共分散をもつ母集団に属す、すなわち、農村部と都市部は同一の母集団に帰納させると判断することができる。したがって、農村部と都市部においてモデルの全体は、異質性よりも、等質性のあるものとして考慮したほうが妥当であると言え

表２　パス解析に投入した変数間の相関係数（農村部・都市部別）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1. 子どもの自尊感情	1	.276 ***	-.028	-.031	-.005	-.039	.063	-.034	.046
2. 情緒的支援・モニタリング	.270 ***	1	.211 ***	.179 **	.200 ***	.137 *	-.033	.035	-.092
3. 生活への関与	-.045	.149 *	1	.256 ***	.296 ***	.391 ***	.176 **	.067	-.121
4. 厳格的統制	.179 **	.110	.286 ***	1	.209 ***	.039	.221 ***	.000	-.081
5. 生活への指示	.036	.149 *	.342 ***	.189 **	1	.273 ***	.218 ***	-.090	-.069
6. 父親の家事参加	.038	.145 *	.462 ***	.100	.135 *	1	.112 *	.005	-.061 *
7. 夫婦間の葛藤	.030	-.009	.264 ***	.222 ***	.137 *	.102	1	-.096	.034
8. 父親の年収	-.077	.020	-.042	.070	-.081	-.123 *	-.096	1	-.133
9. 子どもの数	.115 *	-.028	-.086	.138 *	.117 *	-.032	.128 *	-.242 ***	1

注．農村部 右上（N=399），都市部 左下（N=301）　　*** p<.001,**p<.01,*p<.05.

表３　三つのモデル適合度の比較

CMIN

モデル	NPAR	CMIN	自由度	確率	CMIN/DF
1. 制約なし	60	179.787	30	0.000	5.993
2. 構造モデルのウェイト	34	218.546	56	0.000	3.903
3. 構造モデルの共分散	30	246.75	60	0.000	4.112

RMR, GFI，RSMEA，AIC

モデル	RMR	GFI	AGFI	RMSEA	AIC
1. 制約なし	0.045	0.936	0.807	0.088	299.787
2. 構造モデルのウェイト	0.048	0.926	0.881	0.067	286.546
3. 構造モデルの共分散	0.063	0.916	0.874	0.07	306.75

よう。

「モデル 2. 構造モデルのウェイト」のパス解析の結果を図 2 に示した。モデルの整合性の指標は、χ^2（56）=218.546, p<.001, GFI=.926, AGFI=.881, RMSEA=.067 であり、本論文のモデルはデータに概ね適合していると言えよう。分析結果によると、第 1 に、父親の厳格的統制が子どもの自尊感情に及ぼす影響について有意な結果が得られなかったため、仮説 1 は支持されなかった。次に、父親の情緒的支援・モニタリングが高ければ、子どもの自尊感情が高まるという結果が得られ、仮説 2 が支持された。また、父親の子どもの生活への関与が高いほど、子どもの自尊感情が低下するということが分かったため、仮説 3 が支持されない結果となった。子どもの数が多い家庭の高校生のほうが、一人っ子家庭の子どもよりも、自尊感情が高いという結果が得られた。本研究では、肖・風（2010）が報告した高校生の発達段階における子どもの数による自尊感情の差が見られないという結果は逆に、家庭内の子どもの数が子どもの自尊感情に影響しているという結果が得られた。

第 2 に、父親の養育行動の規定要因については 4 つの要因に影響が見られた。まず、父親の家事参加が多いほど、子どもへの情緒的支援・モニタリング、子どもの生活への関与、生活への指示が高いという結果となり、仮説 4 は支持されなかった。次に、父親の年収が父親の養育行動に及ぼす影響については、有意な結果が得られなかったため仮説 5 は支持されなかった。その理由として、今回の調査では農村部と都市部それぞれにおいて、父親の年収の格差が著しくないことが考えられる。夫婦間の葛藤が多ければ、父親の子どもの生活への関与、子どもの生活への指示、厳格的統制が高くなるという結果が得られたため仮説 6 は支持されなかったが、夫婦の葛藤の家庭ほど父親の厳格的統制が高いという結果が得られているため、「流出仮説」を支持する結果となった。最後に、子ども数が少なければ、父親の子どもの生活への関与が高くなるという結果が得られ、仮説 7 は支持されなかった。一人っ子家族のほうが、父親は子どもの生活へ多く関与するという傾向が見られ、馬・平山（1989）の母親を対象とした研究結果と一致しているといえよう。

農村部と都市部の差について、モデルにおける各変数間の係数を比較したところ、いくつか有意な結果が得られた。まず年収について、農村部と都市部の父親の差が有意に見られ（農村部 r=.846, 都市部 r=1.357, p<.001）、都市部の父親の全体的な年収のほうが農村部よりも高いということが示された。次に、父親の家事参加について農村部と都市部の差が統計的に有意に認められた（農村部 r=.404, 都市部 r=.574, p<.001）。つまり、都市部の父親の家事参加が、農村部の父親よりも高いということが明らかになった。また、

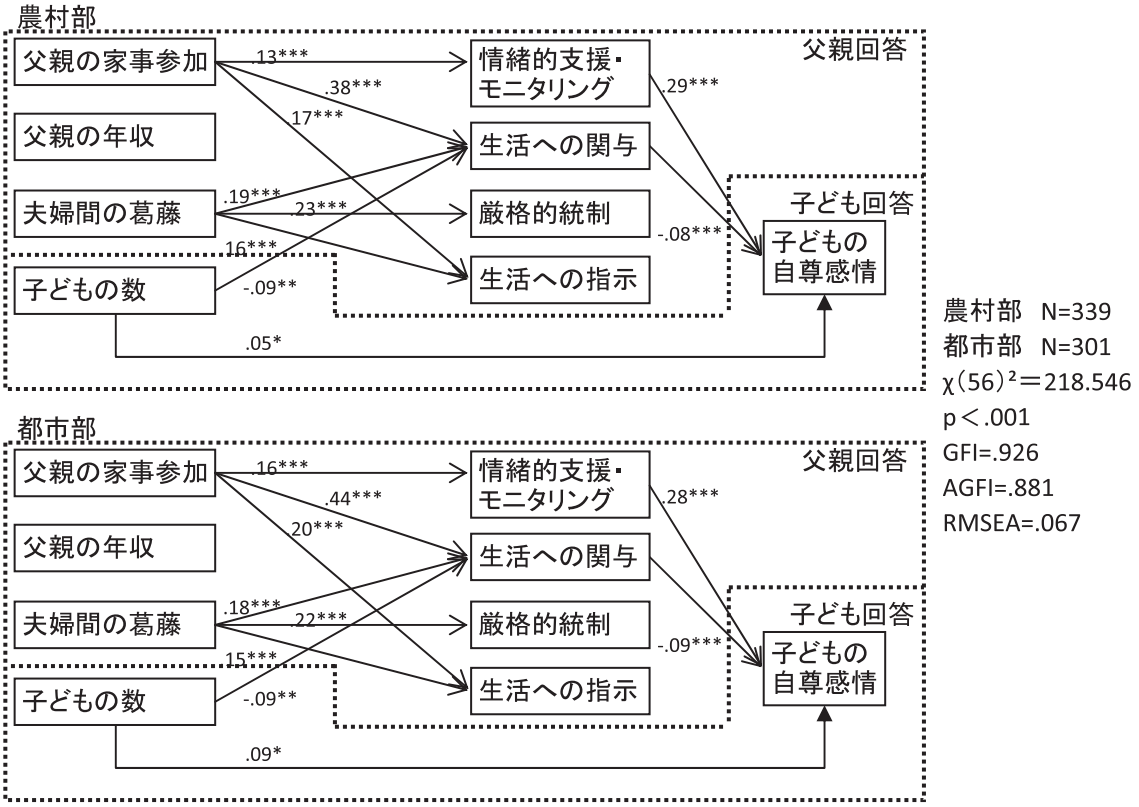

図 2　農村部と都市部における父親の養育行動の要因と自尊感情への影響　パス解析結果

父親の家事参加と子どもの生活への指示については、父親の家事参加が高ければ、農村部の父親の子どもの生活への指示が高くなるが、都市部の父親よりも影響する程度が強いといえる（農村部 r=.366, 都市部 r=.144, p<.05）。さらに、子どもの数と父親の子どもの生活への指示の関連については、都市部において子どもの数が多ければ、父親の子どもの生活への指示が多くなるが、農村部においてこの傾向は見られなかった（農村部 r=-.099, 都市部 r=.128, p<.05）。最後に、父親の厳格的統制と子どもの自尊感情の関連について、都市部の父親において厳格的統制が高ければ、子どもの自尊感情が高くなるが、一方、農村部においてこの傾向は見られなかった（農村部 r=-.038, 都市部 r=.113, p<.01）。

Ⅴ．まとめと考察

本論文は、中国の山西省の農村部と都市部に注目し、父親による養育行動が思春期の子どもの自尊感情におよぼす影響について検証した。主な結果として類似点２つと相違点３つがあげられた。まず農村部と都市部二つのモデルにおける類似点について言及する。第１に、山西省の農村部と都市部の父親において、情緒的支援・モニタリングが高いほど、子どもの自尊感情が高くなるという結果が得られた。先行研究（Holmbeck et al 1995；末盛 2000）では、情緒的支援とモニタリングが子どもの自尊感情を向上させることが示されているが、本研究ではこれらの知見を支持する結果となった。子どもが父親から情緒的支援を受けることで、自分自身に対する自信や他人からの受容感が高まることが考えられる。この結果により、思春期の子どもにとって、父親からの情緒面へのサポートが重要であると示唆された。また、父親のモニタリングは思春期の子どもが非行へ走ることを防ぐのみではなく、情緒的支援と融合することによって、子どもの自尊感情を向上させている。したがって、父親からの情緒的支援とモニタリングは子どもに対して欠かせない養育行動であるといえよう。

第２に、子どもの数が少なく、父親の子どもの生活への関与が多いほど、子どもの自尊感情が低下するという結果が得られた。まず、父親の子どもの自尊感情への影響については、親が高校生の子どもに関与しすぎると、子どもは自分で決められないことが増え、親を頼ってしまう。その結果、子どもは自信を持って行動できなくなってしまうということが考えられる。それゆえ、父親の子どもの生活への関与が高いほど、子どもの自尊感情が低下してしまうのである。次に、子どもの数と父親の子どもの生活への関与との関連については、石井クンツ（2009）によれば、乳幼児を持つ家族の場合子育てに手がかかるため、子どもの数が多い家族では、子育てのニーズが高いとされており、父親の子育てへの関与が多くなることが示されている。一方、中国を対象とした本研究では、子どもの数が多い家族よりも、一人っ子家族の父親のほうが子どもの生活への関与が高いという結果が得られた。父親が子どもの生活に関与する理由については、「できるだけ勉学に集中してもらうため、子どもの身の周りのことをすべてやってあげたいから」などという意見が寄せられた。このように、中国の農村部と都市部いずれにおいて、一人っ子家族の父親が子どもの数の多い家族よりも、子どもの勉強を重視していて、生活への関与が高い。しかし、そのことは子どもの自尊感情の発達に悪影響を及ぼすことが示された。よって、父親は思春期の子どもに関与しすぎないように注意すべきだと考えられる。

次に、農村部と都市部の相違点について検討する。第１に、年収について、都市部の父親のほうが農村部の父親よりも高いことが明らかにされた。まず、今回の調査を依頼した地域について、A 市郊外の農村部では、農業が盛んであり、農産業が地域経済の中心である。一方、省庁所在地 B 市では、商業・工業・サービス業などが地域経済の主な構成要素であり、山西省の経済と政治の中心地となっている。分析の結果によると、A 市では「農業に従事している」と回答した対象者が５割未満であったのに対し、B 市では「企業・団体で働いている」と「自営業をしている」と回答した父親が６割近くを占めている。このように、省内の地域によって就業形態に偏りがあり、これら農村部で農業から得た収入と都市部での勤務による賃金の違いは、所得格差を生む源と思われる。このような所得格差は、社会階層の分化にも関連している。一般に農業労働者階級の社会地位が低いとされている[2]。次に、政策面において農村・都市間の違いについては、都市部の住民には医療保険、住宅手当、企業年金と失業手当などの社会保障がある一方で、農村部の住民には、同様の社会保障制度に恵まれないため、格差が並存している（薛ら 2008）。このように、農村・都市部間の人々の所得と社会保障における二重の格差があり、今後、地域間・階層間の格差が拡大していくと予想される。このような格差を解消するためには、国や地方政府が、農村部の住民の福祉・社会保障の改善できることに力を入れ、農村部の実情に相応しい制度を立ち上げるべきであろう。

第２に、父親の家事参加率について農村・都市部間の差がみられた。都市部の父親の家事参加率が高い一方で、農村部の父親の家事参加率が低いという結果となった。家事参加のうち、日常の買い物、部屋そうじ、洗濯、食事の用意と後付けについては、「しょっちゅうある」と回答した都市部の父親は農村部よりも多かった。一方、「ゴミ出し」という回答項目のみ、農村部の父親は都市部よりも多く

行っているという結果が得られた。つまり、農村部の父親では、家事への参加といえば、主にゴミ出しという力仕事を意味し、それ以外の日常の買い物、部屋そうじ、洗濯、食事の用意と後付けにはあまり参与していないということが明らかになった。都市部の父親では、このような傾向が見られず、家事参加に積極的な姿勢がうかがえる。このような結果から、家庭内役割分業において都市部では農村部より男女共同参画が進んでいることは明らかであろう。

第３に、夫婦間の葛藤と父親の家事参加の関連について、農村部では、夫婦間の葛藤が多い場合、父親の家事参加が多いという正の相関関係が得られたが、都市部においては相関関係が見られなかった。夫婦間の葛藤のうち、家事の役割分担についてどれぐらいの頻度で協議・喧嘩するのかを父親に質問した。その記述統計の結果によると、農村部では家事に参加する父親が少ないが、家事の役割分担に対して夫婦間の協議や葛藤は少ないという結果となった。家庭内の役割分担について夫婦間の協議が重要にもかかわらず、葛藤に至るほど話し合いがされていないことから、山西省農村部の父親たちは、男女の偏った役割分担について問題視していないことがいえよう。農村部の人々は、まだ「男は力仕事、女は家事・育児」といった伝統的な性別役割分業観を保持していることが明らかになった。したがって、農村部でのジェンダー平等観念の浸透が望ましいと示唆できる。

本研究の限界と今後の課題について述べる。第１に、本研究の農村部と都市部の調査は山西省内に限定したため、サンプルの偏りがあることが考えられる。今後は山西省以外の地域において異なる農村と都市の対象者に関しても調査を行い、同様の結果が得られるかどうかを確かめることは重要である。第２に、父親と子どもの関係を中心に取り上げたため、母親の養育行動の子どもへの影響については検討できなかった。母親を含め、父母子三者の相互影響関係を検討することが今後の課題である。

本論文では、中国山西省の農村部と都市部に焦点を当て、父親の養育行動が思春期の子どもの自尊感情へ与える影響と父親の養育行動の規定要因について検討した。父親の養育行動が思春期の子どもの自尊感情へ与える影響が大きいことと、夫婦の葛藤、父親の家事参加、子どもの数が父親の養育行動の規定要因になっていること、およびジェンダー平等において農村部と都市部の相違が明らかになったことに本研究の意義があると考える。

（謝辞）

2010 年度本研究の調査実施にあたり、グローバル COE から研究支援助成金を頂きましたことに謝意を表します。また、査読をして下さった先生方に感謝申し上げます。昨年度山西省省庁所在地Ｂ市の調査でご協力を頂きましたＣ高校の王憲梅先生と各クラス担任の先生方、そしてＤ高校の宋愛文先生と各クラス担任の先生方、ご協力くださいました保護者の皆様に、心より深くお礼を申し上げます。

（注）

1　1980 年以降、政府の発展戦略の政策により、中国全土は「東部沿岸地域」「東北地域」「西部地域」「中部地域」4 つの地域に分類されてきた。山西省は「中部地域」に属しており、地域経済では石炭採掘産業と農産業が主な柱となっている。近年中国では、都市化により鉄鋼、建築材、燃料などの国内需要が増加しているため、山西省の石炭、天然ガスなどの化学工業関連産業が急速に成長してきている。2003 年以来、山西省は中国国内 GDP 成長率の高い省のランキングで、連続３年第２位を占めていた。一方、農村部では、産業構造の変革がなされているなか、経済の発展が緩やかに進んでおり、依然として農産業が地域経済を支えている。そこで筆者は、山西省の農村部と都市部は、中国の中部地区の典型的な地域として挙げられると考えたため、調査地として選定した。

2　『当代中国社会階層研究報告』（陸 2002）によると、職業の分類を基に組織資源、経済資源と文化資源の所有状況を基準として、10 大階級に分類された。つまり、①国家・社会の管理者階級、②経営者階級、③私営企業主階級、④専門技術者階級、⑤事務職員階級、⑥個人商工業者階級、⑦商業・サービス業従業員階級、⑧産業労働者階級、⑨農業労働者階級、⑩無職・失業・半失業者階級という分け方である。この本に対する議論は賛否両論であったが、農業労働者階級の社会地位が明らかにされていると考えられる。

（文献）

馬鋼・平山宗宏，1989,「一人っ子の母親の養育態度に関する研究」『小児保健研究』48(3)：353-358.

Gecas,V., 1979, “The influences of social class on socialization” W.R.Burr,R.Hill,F.I.Nye,&Reiss,I.L(Eds)*Contemporary Theories about the Family*, 365-404.

原田彰・村沢昌崇・白松賢・西本裕輝，1995,「学力問題へのアプローチ：生徒文化・自尊感情を中心に」『日本教育社会学会大会発表要旨集録』47：153-156.

費涓洪，1993,「改革与農村婦女家庭角色的変化」薛素珍・趙喜順・費涓洪・周開麗編『中国農村家庭』，上海社会科学院社会学研究所・四川社会科学院社会学研究所，195-205.

Holmbeck,G.N., PaoKoff,R.L. and Brooks-Gunn,J., 1995, “Parenting Adolescents” Bronstein,M.H.eds., *Handbook of Parenting Vol.2 Biology and Ecology of Parenting*, London: Lawrence Erlbaum Associates, 91-118.

堀口美智子，2006,「乳幼児をもつ親の夫婦関係と養育態度」『家族社会学研究』17(2)：68-78.

Ishii-Kuntz.M. and Coltrane,S., 1992, “Predicting the Sharing of Household Labor: Are Parenting and Housework Distinct?” *Sociological Perspectives*, 35(4)：629-647.

石井クンツ昌子，1998,「米国における父親研究の動向」『家族社会学研究』10(2)：135-141.

石井クンツ昌子，2009,「父親の役割と子育て参加 -- その現状と規定要因、家族への影響について」,『家計経済研究 』81：16-23.

石川周子, 2004,「父親の養育行動と思春期の子どもの精神的健康」

『家族社会学研究』15(2)：65-76.

Krishnakumar.A.and Buehler.C., 2000, “Interparental Conflict and Parenting Behaviors: A Meta-Analytic Review” *Family Relations*, 49：25-44.

Lamb, Michael E., 1953, *The role of the father in child development*（久米稔ほか共訳，1981，『父親の役割：乳幼児発達とのかかわり』家政教育社 ）.

Lynn.D.B.,1978, *The father*, Monterery, Cal: Wadsworth Pubishing Company.（今泉信人・黒川正流・生和秀敏・浜名外喜男・吉森護訳，1981，『父親 その役割と子どもの発達』北大路書房）.

Maccoby,E.E.and Martin,J.A.,1983, “Socialization in the Context of thefamily: Parent-Child Interaction.” *Handbook of Child Psychology:Vol.4 Socialization, Personality, and Social Development*. P.Hmussen（SeriesEd.）&E.M,Hetherrinton（Vol,Ed）, NewYork:Wiley, 1-101.

宮坂靖子，2007，「中国の育児―ジェンダーと親族ネットワークを中心に」落合恵美子・山根真理・宮坂靖子編『アジアの家族とジェンダー』勁草書房，100-120.

Patterson,G.R.,1986,“Performance models for antisocial boys” *American Psychologist*, 41：432-444.

陸学芸，2002，『当代中国社会階層研究報告』社会科学文献.

Rosenberg, M., 1965, *Society and the adolescent self-image*, Princeton, NJ:Princeton University Press.

劉楠，2010，「現代中国の農村部における父親の統制行動と高校生の自尊感情 - 山西省運城市での調査を通して -」『家庭教育研究所紀要』32：23-32.

薛進軍・荒山裕行・園田正，2008，『中国の不平等』日本評論社.

孫雲暁，2009，『父教力度決定孩子高度』新世紀出版社.

末盛慶，2000，「母親の養育行動と思春期の子どもの自尊心－文脈効果の検証」『家庭教育研究所紀要』22：18-31.

末盛慶，2008，「中学生の子どもに対する母親の養育行動を規定するもの -『夫婦関係と親子関係のつながり』は本当か？ -」『家庭教育研究所紀要』30：32-42.

肖富群・風笑天 , 2010,「我が国における一人っ子研究の 30 年：二つの角度及びその限界」,『南京社会科学』7：45-52.

豊田秀樹，2007，『共分散構造分析［Amos 編］－構造方程式モデリング－』，東京図書.

中国社会科学院社会学研究所婚姻家庭研究室 , アジア女性交流・研究フォーラム編，1994，『現代中国における都市家族の意識と生活に関する研究：北京調査及びバンコク・ソウル・福岡との比較』アジア女性交流・研究フォーラム.

内田由紀子，2007，「自尊欲求」，村田誠四郎編『応用心理学事典』丸善株式会社，68.

谷口洋志・朱珉・胡水文，2009，『現在中国の格差問題』同友館.

矢澤澄子, 2003,「少子化時代の子育てと『母』の変容」矢澤澄子・国広陽子・天童睦子編『都市環境と子育て－少子化・ジェンダー・シティズンシップ』勁草書房，56-57.

Effects of Chinese Fathers' Parenting Practices on Self-esteem of High-school Students : A Comparison between Rural and Urban Families in China

Nan LIU
(Interdisciplinary Gender Studies)

The one-child social policy has been enforced in China since 1978. At the same time, with an economic growth, the gap in development between urban and rural areas has been increasing. Several previous studies examined mothers' childcare and its effect on children. Recently, the focus has shifted to fathers' childcare because fathers' childcare is reported to contribute to children's development. However, these studies are still few in number. In this study, I examine how fathers' parenting practices affect adolescents' self-esteem, and the similarities and differences of these effects between rural and urban families in China. This study uses data from 372 high-school students and their fathers working in the suburb of the Shan Xi province in 2010; as well as 374 high-school students and their fathers working in the city of the Shan Xi province in 2011. Results of this study are as follows: (1) if fathers' emotional support and monitoring practices are higher, children's self-esteem was more likely to be high; (2) if the number of children was fewer in the household, the fathers' paternal instructions in childcare were more likely to be high on daily life, and consequently, children's self-esteem was more likely to be low; (3) if marital conflicts are high, fathers' paternal instructions in childcare and strict parenting practices were more likely to be high; (4) if fathers' involvement in housework on daily life was greater, their paternal instructions in childcare as well as emotional support and monitoring practices were also more likely to be high. Fathers' income, however, was not a factor affecting their parenting practices. This study concludes that fathers' emotional support and monitoring practices as well as their instructions in childcare influence adolescents' self-esteem. Moreover, marital conflicts, fathers' involvement in housework and the number of children are the factors that influence fathers' parenting practices.

Keywords: self-esteem of high-school students, Chinese father's parenting practices, rural and urban families, conjugal conflicts, fathers' involvement in housework